

## 現代青年の規範意識と私生活主義\*

—パーソナリティ特性との関連について—

和田 実<sup>1)</sup> 久世 敏雄

### 問 題

青年期において、人は自己の意識、態度、価値観などを明確化する。そのなかでも特に、社会的な関心が高まり、社会事象に対する判断や評価をする。これが社会意識といわれるものである。このような社会事象に対する意識や態度は明らかに時代的な影響を受けるものと考えられる。

われわれは、これまで風間・秋山(1981)、宮島(1976)、田中(1976)、吉田・荒井(1982)などの研究を参考に、青年の社会意識を規範意識と私生活主義(privatization)という2つの側面からとらえてきた(久世・宮沢・二宮・和田・後藤・浅野・宗方・大野・内山・鄭, 1987; 久世・和田・鄭・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗方・内山・平石・大野, 1988)。そこでの規範意識とは家庭や学校、社会における対人関係などにおいて、多くの者によって共有されている伝統的・慣習的な言動についての基準や習慣などに対する意識をさし、一方、私生活主義とは、「公」に対して「私」の生活と利益を重視しようとする生活の構えであり、自分自身や身近な事象への関心、それとは逆に社会的な事象への無関心、自分の感覚や実感の重視、自分の欲求と利益の重視などをさす。これまでの我々の研究(久世・宮沢ほか, 1987; 久世・和田ほか, 1988)によると、私生活主義は「身近な事象への関心・社会的な事象への無関心」と「自分の感覚や実感の重視」の2つの側面に分かれることが見いだされている。さらに、なかでも現代青年の特徴として自分の感覚や実感を非常に重視しているのが明らかにされている。

なお、各概念の具体的内容は以下のとおりである。

#### (1) 規範意識

規範は、多くの者によって共有されている価値基準と

その実現のためにとられるべき行為の様式をさす。その規範が内面化されたものが規範意識である。

#### (2) 私生活主義

① 自分自身と身近な事象への関心・社会的な事象への無関心：私生活の充実(享樂的生活)、私的人生観(趣味に生きる、のんびりした暮らし)、居心地の良さ(快適さ、身のまわりの充実)、他者への関心の低さ、かかわりの拒否、社会的政治的無関心(自分の生活にかかわらないことに対して)、無力感、見通しの無さ(なりゆきまかせ、安易への傾斜)などをさす。

② 自分の感覚や実感の重視：自分の感情の重視(好き嫌いの重視、自分のありのままの気持ちの表出)、人と同じことをしない(目立ち、個性の尊重)、権利・自由の主張(他人の犠牲にはならない、個人の利益の主張)、個人の尊重(他人からの干渉を嫌う)、利己主義的(人は人、自分は自分、他人のことは気にしない、人に煩わされない)などをさす。

そこで、本研究では、社会意識が各個人のパーソナリティ特性とどのような関連があるのかを調べることにより、社会意識尺度が妥当なものであることを示すのを目的とする。とりあげるパーソナリティ特性は、権威主義、自尊感情、および統制の位置(locus of control)である。

権威主義とは、社会的な事実を、その固有の内面的価値によってではなく、外面的な権力や威信によって判断したり意味づけようとし、その結果、人間や社会現象を上下のヒエラルヒーとして捉える視点が卓越する(濱島・竹内・石川, 1982)。したがって、権威主義的な人ほど、社会の多くの者によって共有されている価値基準である規範にしたがう、すなわち、規範意識が高くなると予想される(仮説1)。

自尊感情とは、自己概念にとまなっているところの価値的な感情であり、自己をどれだけ価値のある、尊敬される人間とみなしているかの評価である。すなわち、自尊感情の高い者は、自己を価値ある人間と見なしているのであるから、自尊感情の高い者ほど、私生活主義の自

\* 本研究は、久世先生を中心とする青年心理学研究会が行なってきた研究を発展させたものである。

1) 東京学芸大学教育学部

分の感覚や実感を重視すると予測される（仮説2）。

統制の位置とは、自己の行動に対する強化の有無をコントロールするのは、自分の力か、外部の力かという認知に関する個人差をいう。そして、内的制御型とは、自分に対して与えられる事象を自分自身の行動の結果であると考えられる場合であり、外的制御型とは、それらの事象を自分の行動とは無関係な（自分がコントロールできない）ものにとらえる場合である。したがって、内的制御型の者は、物事の結果は自分次第と考えるので、私生活主義の自分の感覚や実感を重視すると予測される（仮説3）。

## 方法

### 1 調査項目

- (1) **社会意識**：久世ほか（1988）の調査Cで用いた項目であり、規範意識16項目、私生活主義29項目からなる。評定は、5件法である。
- (2) **統制の位置**：鎌原・樋口・清水（1982）が作成した尺度で、4件法の18項目からなる。
- (3) **権威主義**：牛島・坂本（1956）による尺度のうち、権威主義的服従性と権威主義的攻撃性の各10項目、計20項目を用いた。評定は5件法である。
- (4) **自尊感情**：星野（1970）による Rosenberg の日本語版で、4件法の10項目からなる。

### 2 調査対象

東京都内にあるA国立大学生154名（男43名、女111

名）、B私立大学生260名（男169名、女91名）、計414名である。いずれも1年生であり、入学後間もない4月に調査を行なった。すなわち、入学後間もない時期に調査を行なったので、入学した大学の学風に、まだ影響されていないと考えられる。

## 結果

### 1 尺度構成

すべての被調査者を対象に、各尺度ごとに因子分析（主因子解、バリマックス回転）を行ない、その結果にもとづいて尺度構成を行なった。

- (1) **社会意識**：因子分析の結果、固有値の減衰状況（4.69, 3.76, 2.65, 1.25, 0.91, ……）から、3因子構造をなしていると考えた（表1）。因子負荷の様子を検討したところ、これまでの研究結果とほぼ同様の項目に高い負荷がみられた。そこで、因子負荷の低かった若干の項目を除いて、これまでと同様に3つの下位尺度として尺度構成を行なった。具体的な項目内容をみると、第1尺度は、『規範意識』を表すもので、「子どもは親を尊敬すべきだ」、「日本の伝統や習慣は尊重すべきである」、「親などの目上の人の意見にはしたがった方がよい」といった9項目からなる。第2尺度は、私生活主義の一つの側面で、『身近な事象への関心・社会的事象への無関心』を表し、「自分が損をしてまで、皆のためにつくすのはバカげたことだ」、「自分ひとりが努力しても世の中はよくなるらない」、「自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない」

表1 社会意識の因子分析結果

	因子負荷量			
	I	II	III	h <sup>2</sup>
<b>第I因子（身近な事象への関心・社会的事象への無関心）</b>				
2. 働くことや勉強することを最小限にして、自由な生活を楽しまたい。	.44	-.16	.03	.23
5. 自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない。	.55	.01	-.02	.31
8. 結局、人のことは自分とは関係のないことだ。	.53	-.00	.03	.29
17. 自分ひとりが努力しても世の中はよくなるらない。	.49	-.05	.00	.24
20. ボランティア活動や奉仕活動などに興味や関心はない。	.53	-.02	-.06	.29
26. 社会問題は自分の生活とはまったく関係のないことだと思う。	.53	-.11	-.10	.31
29. 政治や社会の問題など、難しいことを考えるのはめんどうである。	.46	-.08	-.09	.22
32. 現状に甘んじ、与えられた範囲内で自分の生活を楽しむ。	.40	.14	-.21	.22
35. 何事も深く考えず、その場しのぎで過ごしている。	.49	-.01	-.14	.26
36. 他人のことで自分の時間をとられたくない。	.55	-.05	.15	.33
39. 自分が損をしてまで、皆のためにつくすのはバカげたことだ。	.59	.01	-.03	.34

第Ⅱ因子（規範意識）

1. 先輩と後輩との上下関係はいつもまもらなければならない。	.11	.40	-.03	.17
4. 親などの目上の人の意見にはしたがった方がよい。	.10	.51	-.10	.28
7. 授業や会合に遅刻したり、欠席してはいけない。	-.13	.48	.03	.25
10. 敬語は大事にしたほうがよい。	-.20	.48	.11	.28
22. 日本の伝統や習慣は尊重すべきである。	-.14	.47	.05	.25
25. この世の中では、義理やしきたりは無くてはならないものである。	.09	.45	-.10	.22
31. 子どもは親孝行すべきである。	-.17	.49	.17	.30
34. 子どもは親を尊敬すべきだ。	-.03	.53	.13	.30
37. 社会のしきたりや習慣にとらわれた生活はいやだ。	.13	-.49	.28	.34

第Ⅲ因子（自分の感覚や実感の重視）

3. 自分で納得のいかないことはしたくない。	.01	-.07	.46	.21
6. 何事も自分で確かめなければ気がすまない。	.04	.24	.39	.21
9. 自分の気持ちをいつわって行動するのはいやだ。	-.14	-.02	.40	.18
12. 世間の目を気にせず、自分のやりたいことをして楽しむ。	.13	-.22	.43	.25
15. 型にはまらず、自分なりのやり方で物事に対処していく。	.01	-.19	.55	.34
18. 他者に教えてもらって納得するのではなく、何事も自分で試してみるべきである。	-.12	.13	.44	.22
24. 自分のやりたい事をする時、まわりの人が反対してもやり通すべきだ。	.10	-.20	.38	.20
27. みんながやっても、自分が納得しないかぎりやらない。	.01	-.09	.50	.25
30. 結果はどうあれ、自分で試してみることが大事である。	-.20	.16	.47	.28
33. 流行を追いかけるのではなく、自分なりのスタイルを大事にしたい。	-.15	.06	.47	.24

残余項目

11. 趣味を持たずに生きるのはつまらない。	-.06	.08	.34	.12
13. 長男が家をつぐのは当然だ。	.26	.25	-.12	.15
14. 社会とのかかわりを多く持つよりも、自分の時間を大事にしたい。	.36	-.20	.25	.23
16. 自分の考えと合わなければ、慣習など無視してもよい。	.17	-.37	.34	.28
19. 学生にとっては、まじめに勉強することが大事である。	-.18	.35	.13	.17
21. 生きていく上で頼りになるものは、自分の経験から得たものだけである。	.35	-.04	.27	.19
23. 戦争や飢餓など日常生活と関係のない問題は忘れがちである。	.28	.08	-.09	.09
28. 自分の考えと合わなければ、親の言うことでもしたがる必要はない。	.08	-.36	.41	.30
38. 自分の好きなことをやる時、いくら時間がかかっても気にならない。	-.00	.03	.30	.09
40. 社会の規則やルールにとらわれず、自由に暮らしたい。	.29	-.28	.34	.28
41. 毎日毎日、あくせくするよりものんびり暮らしたい。	.20	-.05	.17	.07
42. だまっていると損をするような場合は、必ず発言する。	-.04	.10	.30	.10
43. 人が話している時は、真剣に聞くべきである。	-.34	.26	.26	.25
44. 論理や理屈よりフィーリングの方が重要だ。	.28	-.15	.06	.10
45. 家庭では、親がすべての実権を握るのが望ましい。	.34	.47	-.09	.34

2 乗 和

4.03 3.29 3.29

※ これまでの研究にあわせ、本文中では第Ⅰ因子を第Ⅱ尺度、第Ⅱ因子を第Ⅰ尺度と変更してある。

といった11項目からなる。第3尺度は、私生活主義のもう一つの側面で、『自分の感覚や実感の重視』を表し、「型にはまらず、自分なりのやり方で物事に対処していく」、「みんながやっても、自分が納得しないかぎりやらない」、「流行を追い求めるのではなく、自分なりのスタイルを大事にしたい」といった10項目からなる。なお、得点が高いことは、その意識や態度が強いことを示す。

- (2) 統制の位置：因子分析の結果、固有値の減衰状況(3.29, 1.50, 0.73, ……)から、1因子をなしていると考えた。そこで、鎌原ら(1982)にしたがい、18項目の単一尺度とした。なお、得点が高いほど、内的制御型であることを示している。
- (3) 権威主義：因子分析の結果、固有値の減衰状況(2.78, 1.84, 1.41, 1.29, ……)から、1因子をなしていると考えた。そこで、尺度構成にあたっては、便宜的に因子負荷量が.30以上の9項目で行なった。具体的な項目は、「先輩の意見や目上の人の生活は、たとえ間違っていると思っても、素直に聞いておけばいつかは役に立つことがあります」、「人から受けた恩はかえすのが当たり前です」、「親に対する服従の心こそ、子どもが学ぶべきもっとも大切な徳です」といった項目からなる。なお、得点が高いほど、権威主義であることを示している。
- (4) 自尊感情：因子分析の結果、固有値の減衰状況(3.50, 1.28, 0.90, 0.85, ……)から、1因子をなしていると考えた。尺度構成にあたっては、いずれも.30以上の因子負荷が得られたので、10項目すべての

単一尺度とした。なお、得点が高いほど自尊感情が高いことを示している。

## 2 尺度の信頼性と尺度得点(標準偏差)

合成尺度の信頼性係数( $\alpha$ )を表2に、尺度得点と標準偏差を表3に示した。さらに、各パーソナリティ特性を統制した社会意識の下位尺度間の偏相関を男女別に表4に示した。

各下位尺度の $\alpha$ 係数の値は、.63~.82となっており、内的整合性は一応、高いと言える。各尺度得点の性差をみると、第2尺度、自尊感情、統制の位置、に有意差がみられる。これは、前者二つは、男性の方が得点が高く、後者は女性の方が内的制御型であることを示している。

次に、3尺度間の相関をみると、男性は第1尺度と第2尺度、女性は第2尺度と第3尺度の間に有意な負の相関関係がみられた。これは、男性は規範意識が高いほど、身近な事象への関心・社会的な事象への無関心が低くなり、女性は身近な事象への関心・社会的な事象への無関心が高いほど、自分の感覚や実感を重視するということを表している。

最後に、大学ごとの男女別の得点、標準偏差を表5に示した。男女により若干異なるが、第1、第3尺度には大学による差はみられない。一方、第2尺度は大学による差がみられ、A大学よりもB大学の方が得点有意に高くなっている(A大学: $M=2.56, SD=0.46$ ; B大学: $M=2.78, SD=0.56$ ;  $t=4.18, df=407, p<.001$ )。すなわち、A大学よりもB大学の方が身近な事象への関心・

表2 各尺度の信頼性

	男性	女性	全体
社会意識			
第1尺度 <sup>a</sup>	.70	.77	.73
第2尺度 <sup>a</sup>	.81	.78	.80
第3尺度 <sup>a</sup>	.70	.74	.72
統制の位置	.76	.79	.78
ファシズム	.63	.67	.65
自尊感情	.77	.82	.80

a…第1尺度は規範意識、第2尺度は身近な事象への関心・社会的な事象への無関心、第3尺度は自分の感覚や実感の重視、を表す。  
以下の表も同様である。

表3 各尺度の平均、標準偏差と性差(t検定)

	男性	女性	性差(t)
社会意識			
第1尺度	3.41 (0.45)	3.45 (0.43)	0.82
第2尺度	2.81 (0.56)	2.58 (0.48)	4.45***
第3尺度	3.72 (0.41)	3.74 (0.39)	0.41
統制の位置	2.79 (0.39)	2.90 (0.40)	2.68**
ファシズム	3.18 (0.45)	3.10 (0.43)	1.72+
自尊感情	2.54 (0.46)	2.45 (0.49)	1.98*

+… $p<.10$ , \*… $p<.05$ , \*\*… $p<.01$ ,  
\*\*\*… $p<.001$

表4 社会意識下位尺度間相関 (男性\女性)

	第1	第2	第3
第1尺度		-.07	-.05
第2尺度	-.23***		-.24***
第3尺度	-.02	-.05	

※各パーソナリティ特性を統制した偏相関である。  
\*\*\*...  $p < .001$

表5 大学ごとの各尺度の平均, 標準偏差

	A 大学		B 大学	
	男性	女性	男性	女性
社会意識				
第1尺度	3.45 (0.49)	3.38 (0.42)	3.40 (0.44)	3.53 (0.43)
第2尺度	2.60 (0.51)	2.55 (0.43)	2.87 (0.56)	2.63 (0.53)
第3尺度	3.81 (0.40)	3.74 (0.39)	3.70 (0.42)	3.74 (0.39)
統制の位置	2.91 (0.35)	2.92 (0.41)	2.76 (0.39)	2.86 (0.38)
ファシズム	3.11 (0.50)	2.99 (0.43)	3.20 (0.44)	3.24 (0.40)
自尊感情	2.62 (0.47)	2.47 (0.51)	2.52 (0.45)	2.43 (0.47)

社会的事象への無関心が高くなっている。

また、A大学の方がB大学よりも有意に内的制御型であり (A大学:  $M=2.92$ ,  $SD=0.39$ ; B大学:  $M=2.80$ ,  $SD=0.39$ ;  $t=3.08$ ,  $df=406$ ,  $p < .01$ ), またB大学の方がA大学よりもファシズム傾向が有意に高くなっている (A大学:  $M=3.02$ ,  $SD=0.45$ ; B大学:  $M=3.21$ ,  $SD=0.43$ ;  $t=4.32$ ,  $df=408$ ,  $p < .001$ )。

### 3 社会意識とパーソナリティ特性との関連

社会意識とパーソナリティ特性との相関関係を男女別に、表6に示した。第1尺度と権威主義には、男女とも非常に高い正の有意な相関がみられる。これは、男女とも権威主義的な者ほど、規範意識が高いことを示している。第3尺度と自尊感情の間では、男性は無相関であるが、女性は有意な正の相関がみられる。すなわち、女性においてのみ、自尊感情の高い者ほど、自分の感覚や実感を重視することを示している。

次に、統制の位置には性差がみられたので、男女をこみにして、全体の平均値の1σの逸脱として、上・下位

表6 社会意識とパーソナリティ特性間の相関

	権威主義		自尊感情	
	男性	女性	男性	女性
社会意識				
第1尺度	.53***	.63***	-.03	.09
第2尺度	-.10	.20**	-.05	-.17*
第3尺度	.04	.08	.07	.20**

\*...  $p < .05$ , \*\*...  $p < .01$ , \*\*\*...  $p < .001$

表7 内的・外的制御型別にみた社会意識得点

	内的	外的	t 検定
	(N=57)	(N=72)	
社会意識			
第1尺度	3.47 (0.45)	3.27 (0.48)	2.47*
第2尺度	2.35 (0.47)	3.10 (0.50)	8.65***
第3尺度	3.88 (0.32)	3.60 (0.42)	4.18***

\*...  $p < .05$ , \*\*\*...  $p < .001$

群 (すなわち、内的制御、外的制御型) に分けた。その平均、標準偏差と検定結果を示したのが表7である。これによると、内的制御型の方が外的制御型の者より有意に自分の感覚や実感を重視しているのが分かる。また、規範意識は内的制御型の方が有意に高く、身近な事象への関心・社会的事象への無関心は外的制御型の方が有意に高くなっている。

## 考 察

### 1 社会意識の全般的特徴

#### 1) 規範意識

久世ほか (1988) の調査C (本研究と同一の項目) の得点を見ると、男性、女性とも、3.34であるのに対し、本研究では、男女ともに若干高く、男性が3.41、女性が3.45である。原因としては、時代の変化 (本研究の調査は久世ほか (1988) から約2年経過)、地域的差異 (本研究の被調査者は東京都内の大学生であるのに対し、久世ほか (1988) は名古屋市及びその近辺の大学生)、被調査者数の違いからくる偏り (本研究の被調査者の数は、久世ほか (1988) の約1/3) など、いろいろと考えられるのであろうが、もちろん、本研究で明確になる

ものではない。

また、久世・宮沢ほか（1987）、久世・和田ほか（1988）では、私立大学生よりも国立大学生の方が規範意識が低いことを報告していた。本研究結果では、国立大学生（A大学）と私立大学生（B大学）の規範意識の間に有意な差はみられなかった。本研究は、いずれも一つの大学でしか調査を実施していないので、解釈には慎重を要するのであるが、入学後間もない4月に調査を実施していることを考えると、入学してくる学生自身に相違はみられないけれども、入学してからの学風（授業システム、サークルでの雰囲気など）に影響され、規範意識に差が出てくるという可能性を示唆しているのかも知れない。より広範な大学で、入学後間もない1年生を対象に、研究することによって明らかになるであろう。

## 2) 私生活主義

### ①身近な事象への関心・社会的事象への無関心

久世ほか（1988）と同様に、女性よりも男性の方が、また国立大学（A大学）よりも私立大学（B大学）の方が得点が高くなっている。もちろん、ここでも後者に関しては、それぞれの大学1校からしかデータを得ていないことに注意しておく必要がある。

### ②自分の感覚や実感の重視

久世ほか（1988）と同様に、大学間に統計的な差はみられなかった。一方、久世ほか（1988）は女性より男性の方が自分の感覚や実感を重視するという性差を報告しているが、本研究では性差も有意ではなかった。これらのことは、すべての大学生が自分の感覚や実感を重視しているということを表すものであろう。

規範意識同様に、本研究から原因を特定することはできないが、私生活主義のいずれも久世ほか（1988）より若干得点が高くなっている。

## 2 パーソナリティ特性との関連からみた社会意識尺度の妥当性

権威主義とは、社会的事実を外面的な権力や威信によって判断したり、意味づけようとするものである。したがって権威主義的な者ほど、社会の多くの者によって共有されている価値基準である規範にしたがう、すなわち、規範意識が高いであろうと予測した（仮説1）。表6によると、男女とも規範意識（第1尺度）は、権威主義と非常に高い正の相関関係がある。これは権威主義的な者ほど、規範意識が高いということを示しており、仮説1は支持されたと言える。

次に、自尊感情とは、自己をどれだけ価値のある、尊

敬される人間とみなしているかの評価であるので、自尊感情の高い者は自己を価値ある人間とみなしているということである。したがって、自尊感情が高い者ほど、私生活主義の自分の感覚や実感を重視するであろうと予測した（仮説2）。表6によると、女性では自分の感覚や実感の重視（第3尺度）と自尊感情の間に正の相関関係がみられるが、男性では何の関連もみられない。すなわち、女性においてのみ、自尊感情が高い者ほど自分の感覚や実感を重視するというを示している。

男性で有意な相関がみられなかった原因として、どのようなことが考えられるであろうか。一つの理由として、女性より男性の方が自尊感情が有意に高く、しかも若干ではあるがばらつきが少ないことがあげられよう。他には、第3尺度と自尊感情の平均得点を大学ごとの男女別にみると、女性は両大学の得点にほとんど差がみられないが、男性ではB大学の得点がA大学に比べ、ともに低くなっている。そこで、男性のみ大学ごとに相関を算出したところ、A大学の男性は、 $r=.23$ と女性なみの相関が得られたのに対し、B大学の男性は $r=.01$ とほとんど無相関であった。なぜ、B大学の男性では、第3尺度と自尊感情に有意な相関関係がみられないのかは、定かではないが、これが本研究の男性で、第3尺度と自尊感情に有意な相関関係がみられない原因になっているであろう。さまざまな大学の男性からのデータを得て、検討する必要はあるが、仮説2は一部支持されたと言える。

最後に、統制の位置とは、自分の行動に対する強化の有無をコントロールするのは、自分の力か、外部の力かという認知に関する個人差を言い、内的制御型の者は自分自身に対して与えられる事象を自分自身の行動の結果と考える。したがって、内的制御型の者は自分の行動しだいで事象が変わると認知するのであるから、私生活主義の自分の感覚や実感を重視するであろうと予測した（仮説3）。表7によると、外的制御型の者より、内的制御型の者の方が有意に自分の感覚や実感の重視（第3尺度）の得点が高くなっている。すなわち、内的制御型の者の方が外的制御型の者よりも、より自分の感覚や実感を重視しているのである。このことは、仮説3を支持していると言える。

## 3 結論

以上のように、社会意識と関連すべきと考えられるパーソナリティ特性との間に、実際に予測通りの関連が見られ、この社会意識尺度が妥当なものであることが示されたと言えよう。

## 引用文献

- 濱島 朗・竹内郁郎・石川晃弘 1982 社会学小辞典  
増補版 有斐閣
- 星野 命 1970 感情の心理と教育(2) 児童心理,  
24, 1445—1477.
- 久世敏雄・宮沢秀次・二宮克美・和田 実・後藤宗理・  
浅野敬子・宗方比佐子・大野 久・内山伊知郎・  
鄭 暁斉 1987 現代青年の社会意識に関する研究  
名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 34,  
25—39.
- 久世敏雄・和田 実・鄭 暁斉・浅野敬子・後藤宗理・  
二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・内山伊知郎・平  
石賢二・大野 久 1988 現代青年の規範意識と私  
生活主義について 名古屋大学教育学部紀要—教  
育心理学科— 35, 21—28.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of  
control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討 教  
育心理学研究, 30, 302—307.
- 風間大治・秋山登代子 1981 現代の青年像—70年代を  
中心とした青年の意識変化— NHK放送文化調査  
研究年報 26, 1—58.
- 宮島 喬 1976 社会意識研究の発展と現状 見田宗介  
(編)「社会学講座 社会意識論」 東京大学出版会  
Pp.163—201.
- 田中義久 1976 社会意識研究の現実的課題 見田宗介  
(編)「社会学講座 社会意識論」 東京大学出版  
会 Pp.203—253.
- 吉田 潤・荒井宏祐 1982 青年の意識—1972~1981—  
NHK放送文化調査研究年報 27, 171—224.
- 牛島義友・坂本龍生 1956 権威主義的価値態度に関す  
る研究 九州大学教育学部紀要, 4, 51—74.  
(1990年8月10日 受稿)

**ABSTRACT**

**Modern Adolescents' Social Consciousness: Its Relations to  
Some Personality Traits**  
Minoru WADA and Toshio KUZE

We (Kuze et al., 1987, 1988) have investigated the modern adolescents' social consciousness from two viewpoints—consciousness of the norms and privatization (focusing on his/her own life). We have found that modern adolescents lay special emphasis on their own senses. Therefore, the purpose of this study is to clarify the validity of the social consciousness scale by Kuze et al (1988) more by examining the relations to some personality traits. Measured personality traits were fascism, locus of control, and self-esteem.

The subjects were 414 freshmen (212 boys and 202 girls). The used scales were the social consciousness scale by Kuze et al (1988), the fascism scale by Ushijima and Sakamoto (1956), the locus of control scale by Kamahara et al (1982), and the self-esteem scale by Hoshino (1970).

Factor analysis of the social consciousness scale revealed the same three factors as Kuze et al (1988). Factor I was labeled "respect for the norms", Factor II was labeled "focusing on his/her own life vs. indifferent to the social affairs", and Factor III was labeled "emphasis on one's own sense".

Major findings are summarized as follows: (1) The more authoritarian they were, the higher their consciousness of the norms was. (2) Those who were internal control types lay more special emphasis on their own senses than those who were external. (3) The higher their self-esteems were, the more special emphasis they lay on their own senses. These results revealed that the social consciousness scale was valid. Further, it was reconfirmed that modern adolescents' primary feature was to lay special emphasis on their own senses.